



社会空間としての階級構造：  
ブルデューの階級論の理論的考察

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 北海道教育大学 公開日: 2012-11-07 キーワード: 作成者: 小内, 透 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.32150/00003840">https://doi.org/10.32150/00003840</a>

## 社会空間としての階級構造

### —ブルデューの階級論の理論的考察—

小 内 透

序 章	問題の所在
第1章	階級概念の規定
第2章	階級分類の視点と方法
第3章	階級構造の特質と再編メカニズム
終 章	ブルデューの階級論の意義と問題点

#### 序 章 問題の所在

現代資本主義社会における階級・階層のあり方は、大きく変化している。雇われ経営者の増加、増大するホワイトカラー層、階級的な社会・政治運動の低迷等々、階級・階層の存在形態はきわめて多様なものになっている。また、ラッシュとアーリが指摘するように、現代の「ポスト・フォード主義」に照応する階層構造・階層形成のあり方も「学歴主義・業績主義による階層化」といった形で確実に変化している<sup>(1)</sup>。

これに対し、従来の資本家階級・労働者階級・中間階級といった形でのオーソドックスなマルクス主義の経済一元論的階級論は、今日の階級構造の多様化に必ずしも十分に答えられなくなっている。しかも、マルクス主義の立場にたった、新たな階級論の構築が模索されているにもかかわらず、未だに有効な理論的展開がなされるには至っていないのが実状である。とはいえ、いわゆる「正統派」社会学の系譜の中で取り組まれてきた社会移動研究・社会成層研究がこれらの現実を十分に理論化した形でとらえているかという点、必ずしもそうではない。社会移動研究の共通認識と呼べるものが確立していないというのが現実である<sup>(2)</sup>。

こうした現実と理論状況の中で、注目すべき理論的営為を進めている社会学者として、ブルデューの存在を指摘することができる。かれは、主著の一つである『ディスタンクシオン』において、経済一元論的なマルクス主義の階級論と「正統派」社会学の系譜をひく社会移動論・社会成層論とともに批判しながら、独自の社会学の構築の一環として新たな階級論を展開しているからである。それゆえ、ブルデューの階級論の特質や課題を明らかにすることは、現代社会のあり方を解明していることとする社会学にとってきわめて有益なことであると考えられる。

同時に、ブルデューの階級論を検討することは、ブルデューの構想する独自の社会学全体の特質を明らかにする上でも、大きな意義を有している。ブルデューの社会学の狙いは、端的にいえば、現象学的社会学・エスノメソドロジー・実存主義等の主観主義的社会学と経済一元論的マルクス主

義・構造主義等の客観主義的社会学の克服にあるといえる<sup>(3)</sup>。この狙いを達成する上で、彼の階級論はきわめて重要な位置を占めている。ブルデュー自身、「諸々の力関係の力学(注—客観主義的社会学)と意味関係の現象学やサイバネティクス(注—主観主義的社会学)との対立は、社会階級の理論において他にはないほど際立って見える<sup>(4)</sup>と述べている。

また、ブルデュー理論の重要な一側面をなす文化的再生産論の特質を浮き彫りにする上でも、彼の階級論の検討は欠かすことができない作業となる。なぜなら、教育社会学における文化的・社会的再生産論は、バーンステインにしろ、ポール・ウィリスにしろ、またボールズとギンティスにしろ、いずれも上流階級・中産階級・庶民階級、資本家階級・労働者階級といった素朴な階級規定に準拠しているのに対し、同じ再生産論の中でも、ブルデューだけは独自の階級論を構築しながら、自らの文化的再生産論を展開しようとしているからである<sup>(5)</sup>。

本稿は、これらの点をふまえ、主として『ディスタクシオン』に基づきながら、ブルデューの階級論の特質を明らかにし、その意義と問題点について検討しようとするものである。

### (注)

- (1) Lash, S. & Urry, L., *The End of Organized Capitalism*, (Polity Press) 1987, p.5.
- (2) この点について、盛山和夫は次のように述べている。  
 「(注—社会移動研究は様々な分析法を生み出したが) その結果、われわれはいったい何を知ったのだろうか。われわれは、階層とはなんであるか、それはどのように区分され、どのような社会的意味を持つかをいまだ知らない。われわれは、階層間移動量は本当に異なる社会や時代の間で変わらないものかどうか、もし変わらなるとすればそれはなぜなのか、をいまだ確定していない。われわれは、階層移動を規定しているメカニズムを知らない。われわれは、学歴水準の一般的な向上が階層移動を促進するのか減少させるのかを知らない。われわれは、世代間移動の移動趨勢にとって、職歴移動がどのように影響しているのかを知らない」(盛山和夫「序文」1985年社会階層と社会移動全国調査委員会編『1985年 社会階層と社会移動全国調査報告書 第1巻 社会階層の構造と過程』, 1988年, 2頁)。
- (3) Bourdieu, P., *Le Sens Pratique*, (Minuit) 1980. (今村仁司・港道隆訳『実践感覚1』みすず書房, 1988年), 訳書, 第1部参照。
- (4) 同上, 223頁参照。
- (5) ただし、そうした理論的努力は彼の文化的再生産論の出発の時点から行われていたわけではない。むしろ、彼の階級論は、基本的には『ディスタクシオン』の段階において本格的に着手され、それ以前の『遺産相続者たち』や『再生産』では、他の論者と同様、素朴な階級概念を用いていた。

## 第1章 階級の概念規定

ブルデューの階級論を論じる場合、なによりもまず、彼の階級概念から吟味しなければならない。なぜなら、かれが『ディスタクシオン』において問題にしているのは、彼の表現によれば、「構築された階級」(la classe construite)であるからである。つまり、そこでは、「構築された階級」とはいかなる意味をもっているのか、またブルデューのいう階級概念が、すなわち「構築された階級」そのものであり、それ以外の階級概念はありえないのかが、問題になる。端的にいえば、ブルデューの用いる階級概念は実体概念なのかどうか、最も重要な論点になる。

そこで、まずこの点から検討して行こう。ブルデューは『ディスタクシオン』の中で次のように述べている。

「(注—慣習行動を解明するには) 慣習行動の統一・産出原理へ、すなわち階級の存在状態および

それが要請する条件づけの身体化された形である階級のハビトゥスへと、立ち戻らねばならない。したがって、均一な生活条件に置かれた行為者の集合としての、客観的階級を構築しなければならないのである<sup>(1)</sup>。

つまり、慣習行動を生み出すハビトゥスは階級によって異なるため、慣習行動の特性を解明するには「客観的階級」を「構築」しなければならないとしている。したがって、ここでは、「客観的階級」を「構築」するとはいかなることなのか問われなければならない。

それは、一方で、操作的な手続きに基づいて階級を「構築」するという意味を持つと同時に、他方で、そこで構築される階級は「客観的階級」でなければならないということの意味している。操作的な手続きによって階級を構築するという事は、研究者の問題意識・主観に基づいて独自の階級を設定するという事に他ならない。その意味でいえば、そうした手続きによって構築された階級は、基本的に主観的なものであって、決して客観的なものとはいえない。にもかかわらず、ブルデューは、「客観的階級」を構築すると述べている。

したがって、彼が「客観的階級」という場合、そこでは、研究者の主観に基づいているかどうか問題なのではなく、階級を設定する場合、階級設定の対象となる諸個人にとって客観的な次元・指標を用いるか、それとも意識・態度といった諸個人にとって主観的な次元・指標を用いるかが問題にされていると考えられる。その意味で、「客観的階級」とは、階級設定の対象となる諸個人にとって客観的なものに基づいて設定された階級であると受けとめることができる。つまり、従来の社会科学において、諸個人の階級帰属意識によって、階級概念を設定する論者がいることも事実であり、それらとは異なる立場で、階級を設定しようとする自らの立場を表現しているといえる。

しかし、それならば、なぜ、あえて客観的階級を「構築」と表現しなければならなかったのか。こうした疑問が生ずるのは、客観的な次元・指標で階級を設定・構築することは、顕在的であるか、潜在的であるかを別にして、一般には、実際に実体として存在している「客観的階級」を析出する作業であると考えられるからであり、そうした認識に立てば、わざわざ、操作主義的なニュアンスの強い「構築」という表現を用いなくてもよいはずであるからである。それゆえ、かれが客観的階級を「構築」という場合、そこには、彼独自の意味付けが与えられていると考える必要がある。この点について、ブルデューは『ディスタンクシオン』では、明確に論じていない。しかし、それは、彼の次のような最近の発言からある程度予測できる。

「いわゆる社会階級なるものは、存在しないのです……。存在するのは社会空間であり、差異の空間であって、そこでは諸階級が潜在的な状態で、つまり一つの所与としてではなく、いわば何かこれから作るべきものとして存在するのです<sup>(2)</sup>。

つまり、社会階級は現実存在ではなく、存在するのは社会空間、差異の社会空間のみであるということであり、彼が問題にする階級は、実在している階級ではないということである。いいかえれば、彼のいう「構築された階級」とは社会空間における諸個人の差異、すなわち社会空間における諸個人の相対的位置の相違を示す概念であるといえる。この点からみれば、ここでいう「構築された階級」という概念はむしろ社会成層の概念に近い。

しかし、このことは、ブルデューが階級を操作的で非実体的な概念としてのみ捉えていることを意味してはいない。なぜなら、「構築された階級」という概念とは区別した形で、実体として存在する階級を把握している場合も見られるからである。たとえば、「マルクス主義理論で武装した政治的作業は、ある場合には動員決定機関とか民衆の代理人などを通して社会階級なるものを存在させることに貢献してきた<sup>(3)</sup>と述べられ、「われわれは、“階級……は、公的にその場、その名で行動し語ることを権威づけられたものとして、自らを人々——自らを完全に認識し、代理人の名で語り行

動する全権力を付与されたものとして代理人を認識することによって、自らを階級の成員として認識し、そうすることによって、集団がもちうる存在形態そのものを階級に与える人々——に押しつけることができる代理人がいるとき、存在するといおう<sup>(4)</sup>という指摘がなされている。そこには、組織化され代理人が構成員の全権力を付与されている場合にのみ、階級が存在するといえるという考え方が示されている。いいかえれば、「構築された階級」概念と異なる、政治的、運動論的視点に基づいた、いわば実体としての組織化された「階級」の概念が見いだせる。マルクスの言葉を用いれば、「構築された階級」が「即自的な階級」に対応し、実体としての組織化された「階級」が「対自的な」階級に対応するものとして把握することもできる。しかし、その場合、ブルデューは「即自的な階級」は実体としては存在せず、研究者が特定の方法で構築することによって初めて把握できるものであり、客観的に実体として存在するのは、「対自的な階級」のみであるという考え方をもっているといえる。

ただし、彼がこれまで主として議論しているのは前者の「構築された階級」であり、いわば「対自的」な階級については必ずしも正面から議論の対象にしていない。それは、一方で、運動論的・政治的視点から把握しうる実体としての組織化された階級が、現実の社会変動に対して、それほど大きな影響力をもちえていないという認識があることに基づいていると思われる。と同時に、他方で、組織化されていない階級を扱う場合、あえて「構築された階級」という概念を使用するのは、マルクスのいう「即自的」な階級概念に対する批判的な認識が存在しているからであるといえる。いわば、「即自的」な階級は実体としては存在せず、実体として存在するのは「対自的」な階級のみであるが、「対自的」な階級自体は今日の段階では議論すべき重要な位置を占めていないという考え方があるといつてよい。その意味で、ブルデューの階級概念は、マルクス的な意味での階級概念とは異なる内実をもつものとして、把握しなければならない。

## 〔注〕

- (1) Bourdieu, P., *La Distinction: Critique sociale du jugement.* (Minuit) 1979. (石井洋二郎訳『ディスタンクシオン I』新評論, 1989年), 訳書, 160頁.
- (2) ブルデュー (加藤晴久編) 『ピエール・ブルデュー 超領域の人間学』藤原書店, 1990年, 79～80頁.
- (3) 同上, 同頁.
- (4) Bourdieu, P. "What Makes a Social Class? On The Theoretical and Practical Existence of Groups", *Berkeley Journal of Sociology*, vol. 32 1987, p. 15.

## 第2章 階級分類の視点と方法

## 第1節 階級の基本的決定因としての資本

ブルデューは『ディスタンクシオン』において、すでにみた「客観的階級」を構築するための階級分類の視点・方法について詳しく論じている。彼の階級論の場合、階級分類の視点と方法に、もっとも独創的な部分があるといってもさしつかえない。

ブルデューは、階級を構築するにあたって、まず従来のような階級・階層論の視点・方法を批判しながら、自らの視点・方法の独自性を強調している。

「社会階級というのは、あるひとつの特性……によって規定されるものでもなければ、いくつかの特性……の総和によって規定されるものでもないし、ましてやこれらの特性を、最も基本的なもの(生

産関係内での位置づけ) から出発して原因から結果、条件づけるものから条件づけられるものへという関係によって順に並べたひとつつながりの連鎖によって規定されるものでもない。そうではなくて、これはすべての関与的特性間の関係の構造によって規定されるもの<sup>(1)</sup>なのである。

ここからわかるように、ブルデューは、単一指標あるいは複数指標に基づいて階級を設定しようとする階級分類の方法を批判している。単一の指標では、複雑な構造をもつ階級を分類するには不十分であり、複数の指標に基づいても、それらを並列に用いた方法では客観的階級は構築できないと考えるからである。だが、同時に、最も基本的な生産関係内での位置づけから出発して「原因から結果、条件づけるものから条件づけられるものへという関係によって順に並べたひとつつながりの連鎖によって規定」しようとする階級分類の方法をも批判している。それは、明らかに経済一元論的な立場に立つマルクス主義的な階級論の階級分類の方法に対する批判として指摘されているものである。その背後には、そうした方法では経済のみによって規定された一面的な階級分類しかなしえないという認識があると思われる。

こうした点をふまえて、ブルデューは、階級はすべての関与的特性間の構造によって規定されるものであるという視点を提起している。いいかえれば、それは、物質的生活条件およびそれが要求する条件づけの「基本的決定因」を階級分類の指標にするとともに、「基本的決定因」から派生する「二次的特性の網」を考慮にいれるという視点でもある。その場合、ブルデューが考えている階級分類の基本的決定因とは、資本の量と構造であり、そこから派生する二次的特性とは人種や性といった「暗黙の要請として、決してはっきりと口にされることなく現実の選択や排除の原理として機能しうると一連の補助的特徴群の全体」<sup>(2)</sup>である。

ただし、実際には、ここでいう二次的特性は階級分類の具体的な次元・指標としては用いられておらず、基本的決定因である資本の量と構造およびそのあり方の変化に基づいて階級を設定し、これらの階級の特性を語る際に、二次的特性が用いられているのが現実である。その意味で、ブルデューの階級分類にとっては、資本の量と構造がなによりもまず重要な指標であるといえる。

それでは、ブルデューのいう資本の量と構造とはいかなるものなのであろうか。

彼は、まず、次のように資本の概念を規定している。

「資本とは社会的関係であり、それが生産され再生産される場においてしか存在もしなければその効果を生みだしもしないひとつの社会的エネルギーなのだから、階級に結びついた諸特性のひとつひとつは、その価値と有効性とをそれぞれの場に特有の法則から受けとるのだということである。……つまり特定の場において行為者たちに割り当てられる社会的位置や特定の権力は、別種の資本に関して彼らがどんなに豊かであろうと……、まず何よりも彼らが動員しうるその分野での特定資本の量によって決まるのだということである」<sup>(3)</sup>。

つまり、資本とは「社会的関係」であると同時に、特定の資本は特定の場(界・市場)でしか意味を持たないものであると規定されている。このうち、特定の資本が特定の場でのみ効果を持つということは、具体的には、財力が意味をもつ場には、それに対応した経済資本が存在し、現代社会における「肩書市場」で意味をもつのは学歴資本であり、社交の場で意味を持つのは社会関係資本であるということの意味している。いいかえれば、現代社会における「肩書市場」や社交の場では経済資本は基本的には意味を持たないし、財力が意味を持つ場では学歴資本は基本的に無力であるということである。したがって、資本とは、けっしてマルクス主義の階級論において基本をなす生産手段の所有—非所有という視点に基づいた概念ではないことが明らかになる。

それでは、資本は「社会的関係」であるとはいかなる意味であらうか。これは、一見するとマルクスが資本を関係概念であるとした規定と重なり合う。マルクスは資本とは賃労働との関係におい

てのみ存在するものであり、その意味において資本は関係概念であるとしている。しかし、ブルデューが、資本は「社会的関係」であるという場合、それは必ずしもマルクスのいう意味での関係概念としての資本概念ではないことに注意する必要がある。なぜなら、すでにみたように、彼が資本という概念を用いる場合には、賃労働の問題は意識されていない。資本が「社会的関係」であるというものは、むしろ、特定の場・界・市場との関係においてのみ、特定の資本が効果を発揮するという意味であると考えるのが妥当であると思われる。いわば、資本は特定の場・界・市場との関係においてのみ成り立つという意味で関係概念なのである。

こうして、彼が用いる資本という概念は生産手段の所有—非所有という視点に基づくものでもないし、資本—賃労働という関係を内包する関係概念としての資本概念でもない。マルクス主義の資本概念とはまったく異なるものなのである。むしろ、それは、廣松渉や今村仁司が指摘するように、モノとしてのイメージをもたらす近代経済学の用いる資本概念に近いものであるといえる<sup>(4)</sup>。

## 第2節 資本の量と構造

ブルデューは、このような意味で把握された資本概念をもとにして、階級分類を行っている。その際、具体的には次のような方法・指標を用いている。

すなわち、ブルデューは、まず資本の総量によって、資本の量の大きい順から支配階級、中間階級、庶民階級の三つの階級を設定する。その場合、資本の総量とは、経済資本、文化資本、社会関係資本という三つの異なる種類の資本量の総和を示している。いわば、これが階級の垂直的な序列を示すものとして描かれる。これに対し、資本構造は、いわば水平的な階級構造を明らかにする指標として用いられる。同一の階級内部における異なる位置を確定するための指標といってもよい。その意味では、階級の下位概念としての階層を分類するための指標であるということもできる。その場合、資本構造とは、異なる種類の資本の構成比を示す概念である。同じ資本量であっても、経済資本は大きい、文化資本が小さい人々と、経済資本は小さい、文化資本が大きい人々は社会空間において異なる位置を占めているということになる。たとえば、同じ支配階級であっても、その内部には、経済資本も文化資本も大きい自由業、経済資本は小さいが文化資本が大きい教授、経済資本は大きい文化資本が小さい経営者が存在するということになる<sup>(5)</sup>。

だが、ここで問題となるのは、資本の量をはかる指標は何かということである。これが理解できなければ、資本の総和量が把握できないし、総資本に占める各種資本の構成比も明示することができないからである。実は、この点については、『ディスタンクシオン』においては必ずしも明らかにされてはいない。この点に関する論述は、それ以降に執筆された論文において、次のような形で、初めて明らかにされるのである。

「普遍的に同等なもの、すなわち、あらゆる同等なものを計る尺度は、(もっとも広い意味での)労働時間以外のなものでもない。そして、各々の場合において、もし資本という形で蓄積された労働時間と、あるタイプから別のタイプへ社会のエネルギーを変形する必要がある労働時間を考慮するならば、すべての転換を通じた社会のエネルギーの維持は証明される。……文化資本のもっとも良い尺度は、疑いもなく、それを獲得するのに費やされた時間の合計である……」<sup>(6)</sup>。

つまり、資本の量、いいかえれば資本の大きさを計る尺度・指標は、当該の資本を獲得するのに費やされた時間の合計ということになる。この表現は、マルクスが資本の原初形態として指定する商品の価値の大きさを計る尺度は、その商品を作るのに費やされた社会的平均必要労働時間であるとした基本テーゼを、思い起こさせる。

にもかかわらず、それは、あくまでもマルクスの労働価値説のアナロジーにすぎず、マルクスの

考え方に立脚したものではない。いうまでもなく、マルクスの労働価値説は商品の価値の大きさを計る尺度についての考え方であり、資本はすでに資本—賃労働の関係が背後に存在することを前提にした商品の転化形態として把握されているものである。しかし、ブルデューのいう資本には、決して商品の転化形態として把握しえない人々の性向、学歴や社会関係といったものまで含まれている。しかも、彼のいう資本はすでにみたように、その背後に決して資本—賃労働関係が含まれていない。それゆえ、ブルデューが資本の大きさを計る指標としてそれを獲得するのに費やされた労働時間をあげたとしても、それは、マルクスの考え方とは明らかに似て非なるものなのである。

### 第3節 集団的軌道と個人的軌道

ブルデューの階級分類はこれで終わるわけではない。社会空間における諸個人の位置を決定する際、資本の量と構造のあり方の変化をも考慮にいれている。

それは、「最初の資本と到達資本のあいだに成りたつ関係は統計学的性格をもっているので、慣習行動を説明するのに、社会空間においてある時点で占められる位置を決定する諸特性だけをこれと関連づけてみても、完全に説明しきることができない」からであり、「ある慣習行動と、出身階層……との相関関係は、……家庭もしくはその人の育った生活条件から直接に及ぼされる教育の効果」と「いわゆる社会的軌道の効果、すなわち社会的上昇あるいは下降の体験が性向や主張に及ぼす効果」に基づいているからである<sup>(7)</sup>。

つまり、ある時点で、社会空間における位置が同じであっても、過去においてまったく異なる社会的位置を占めていた者がいる場合、彼らは過去の経歴が違うだけでなく、それによって現在の慣習行動に違いがもたらされるということに注目しているのである。ブルデューは、こうした過去の時点で獲得されたハビトゥスがある後も効果を持つことを「ハビトゥスの履歴現象効果」という言葉で表現している。したがって、現時点で同じ階級・階層であっても、異なる経歴であれば、当然異なった慣習行動が生まれ、それゆえ、その視点からみれば、同じ階級・階層内にさらに異なる階層が存在しているということになる。この点をふまえなければ、社会空間における諸個人の社会的位置を明らかにしえないということである。こうした視点から、過去における諸個人の社会空間における位置と現時点における位置との関係を示す概念として社会的軌道の概念が導入されるのである。

その場合、社会的軌道には、集団的軌道と個人的軌道という二つの側面があるとされる。

集団的軌道とは、社会的軌道のうち、「軌道の効果がある階級や階級内集団の上に、すなわち共通して同じ位置を占め、その階級が上昇するか下降するかを決定する」<sup>(8)</sup>側面を示している。彼は、これを具体的に捉えるために、各階層の全階層に占める構成比の変化によって示している。これに対し、個人的軌道とは、「ある時点で同じような位置を占めている人々が、その資本の量と構造が時間のながれとともに変化してゆくために生じる差異」<sup>(9)</sup>である。現時点における各階層の内部における出身階層の違いによってそれが示される。たとえば、中間階級のひとつの階層である小学校教員層には、個人的軌道からみた場合、上向きの勾配の軌道をもった上昇移動層、軌道の勾配がゼロの地位が維持されている層、下向きの勾配の軌道をもった下降移動層が含まれるという具合になる。

ここで示される、集団的軌道の概念は、従来の社会移動研究の中で強制移動と呼ばれてきた側面にほぼ対応し、個人的軌道の概念はいわば「純粹移動」に対応しているといえる。その意味では、新たな概念で、従来の社会移動研究によって示されていた社会移動の二つの側面を示そうとしたものであるという見方も可能である。

しかし、ブルデューは、すでに述べたように、自らの階級論を従来の社会移動研究とは一線を画

すものとして構築しようとしていることも忘れてはならない。その場合、それは、たとえ、現象的には、集団的軌道が強制移動に対応し、個人的軌道が純粋移動に対応しているとしても、その背後にある移動のメカニズムに関する認識が従来の社会移動研究とは異なっていることを示している。

第一に、従来の社会移動研究の場合、その多くは、基本的にどのような出身階層に生まれたとしても、自らの努力の如何によって高い「業績」——現代においては主として学歴が重要な「業績」になる——を獲得しさえすれば、高い社会的地位、つまり高い階層に移動することができるという考え方をもっている。いわば、属性原理の社会とは異なる業績原理の社会として現代社会を捉え、その中での自由な移動を社会移動として考えているといえる。これに対し、ブルデューは、「個人というのは社会空間のなかを行きあたりばつりに移動するものではない」<sup>(10)</sup>、あるいは「すべての到達位置がすべての出発点にとってかならずしも同じ可能性をもっているわけではない」<sup>(11)</sup>という表現に明らかなように、個人的軌道の場合においても、それは諸個人の自由な社会移動を示すものではないという認識を有している。この点に従来の社会移動研究との相違が存在しているといつてよい。

第二に、従来の社会移動研究と異なる点は、軌道の概念で示される内実が、たんなる職業階層の移動を示すものではないということである。ブルデューには、異なる職業間の移動があった場合においても、軌道の勾配がゼロの場合がありうるという認識が存在している。たとえば、小土地所有者から下級官吏への職業の世代間移動や小職人から事務員・商店員への職業移動がそれぞれ社会的地位の継承を意味することもありうると思われる<sup>(12)</sup>。なぜなら、産業構造の変化や社会状況の変化等のために、かつて社会空間において小土地所有者が占めていた相対的位置が下級官吏によって置き換えられ、同様に小職人が占めていた相対的な社会的地位が事務員・商店員によって置き換えられる場合があるからである。それは、諸階級や階級内集団の形態的变化(層の厚みの量的変化)がある場合、いいかえれば集団的軌道が変化した場合に生ずるものである。それゆえ、軌道の概念によって問題となるのは、社会空間における相対的位置そのものの変化であり、それは職業の変化によっては捉えきれない場合があるということである。したがって、職業移動を指標にした従来の多くの社会移動論とは、この点でも異なっていると見る必要がある。

第三に、軌道の概念は、階層移動の結果を示すために用いられるだけでなく、諸個人ないし集団の慣習行動、性向、主張の違いを生み出すメカニズムを浮き彫りにするためにも重視されている。少なくとも、社会移動のあり方そのものを研究してきた従来の社会移動研究においては、こうした視点は軽視されていたといつてよい。その点では、むしろ、軌道の概念は、「生活史」あるいは「ライフコース」の概念に類似していると考えることができる。もちろん、軌道の概念は、「生活史」や「ライフコース」の概念と異なり、軌道の過程そのものの中で展開されている様々な社会過程や諸個人のいわば社会化の内実を詳しく把握しうる概念ではない。それは、軌道の概念があくまでも「最初の資本と到達資本」の間の上昇・下降・平行移動の3パターンで把握される点からみても明らかである。にもかかわらず、軌道の考え方は、単純な形ではあるが、諸個人が階層移動を行うことが諸個人の慣習行動、性向、主張といった主体的な特性を規定するという考え方を有している点で、従来の社会移動研究よりも、「生活史」研究や「ライフコース」研究にちかいかいものになっていると考えることができる。

こうして、軌道の概念は、従来の社会移動論・社会成層論とは異なる立場で、階級・階層移動の現実を把握するために導入されたものであることが明らかになる。

〔注〕

- (1) 石井洋二郎訳『ディスタンクシオン I』新評論, 1989年, 166頁.
- (2) 同上, 161頁.
- (3) 同上, 177頁.
- (4) ブルデュー (加藤晴久編)『ピエール・ブルデュー 超領域の人間学』藤原書店, 1990年, 182頁.
- (5) 前掲『ディスタンクシオン I』, 178~180頁.
- (6) Bourdieu, P. "The Forms of Capital", in Richardson, J. (ed.), Handbook of Theory and Research in the Sociology of Education, (Westport, Conn., Greenwood Press) 1985, p. 253.
- (7) 前掲『ディスタンクシオン I』, 173~174頁参照.
- (8) 同上, 174頁.
- (9) 同上, 174頁.
- (10) 同上, 171頁.
- (11) 同上, 172頁.
- (12) 「実証主義的単純さは、諸階級や階級内集団の形態の変化(層の厚みの量的変化)の効果として『上昇移動』として描こうとする傾向にも見られるが、これでは社会構造の再生産がある条件のもとでは『職業の世襲』を最小限に切りつめることを要求することもありうるという事実、目がいかなくなってしまう。だいたい行為者たちが、社会構造における自分の位置と、自分に与えられた序列を示す諸特性を、身分の変化に結びついた転移(たとえば小土地所有者の身分から下級官吏の身分への転移とか、小職人の身分から事務員や商店員の身分への転移)をおこなうという代価を払うのでなければ維持できなくなったとき、かならずこの職業世襲の縮小という事態がおこるわけである。」(同上, 200頁).

### 第3章 階級構造の特質と再編メカニズム

#### 第1節 階級構造の特質——交差配列構造と相同性

ブルデューは、こうした視点・方法によって構築された諸階級・階層の社会空間における配置図ともいえるべきものを提示している<sup>(1)</sup>。いいかえれば、ブルデューの階級論は階級の分類論にとどまらず、社会空間における階級構造のあり方をも問題にしているということである。

その場合、階級構造が階級・階層の垂直的な秩序だけでなく、水平的な秩序をも有している点に大きな特徴がある。垂直的な秩序とは、いうまでもなく、資本の量によって決まる社会空間における相対的な位置の上下の違い、すなわち支配階級・中間階級・庶民階級の違いであり、水平的な秩序とは資本の構造によって決まる同一の階級における、様々な階層の違いである。

ブルデューによれば、従来の社会移動論の場合、基本的に垂直的な階層秩序のみが問題とされており、水平的な階層秩序は等閑に付されてきた。しかし、資本の構造という視点からみれば、特定の階級の中に交差配列構造とも呼びうる構造が存在していることが明らかになるとされる。

たとえば、「芸術家層から商・工業経営者層へと移るにつれて経済資本の量が連続的に増大し、反面文化資本の量は小さくなるということから、支配階級は交差配列構造にしたがって構成されていることがわかる」<sup>(2)</sup>。同様に、中間階級の場合、「小学校教員から中規模の商・工業経営者、一般管理職、中間的位置を占める一般技術員や事務員……へと移るにつれ、やはり経済資本が増大する一方で文化資本のほうは減少するという現象がみられる」<sup>(3)</sup>。

つまり、ブルデューのいう交差配列構造は、支配階級と中間階級の内部に、経済資本と文化資本の総資本量に占める構成比のあり方が異なる層＝階層が連続的な形で——すなわち経済資本が大→

小、文化資本が小→大という形で——存在することを示すものである。

このことは、見方をかえれば、支配階級と中間階級の場合、それぞれの階級内における交差配列構造上の位置という点で、同様な立場の階層が存在することを意味している。いいかえれば、水平的な位置が同じ階層、あるいは（経済資本と文化資本の）資本の構造のあり方が同様な階層が、階級を越えて見いだせるということである。ブルデューは、これを、「支配階級空間と中間階級空間との相同性」と呼んで重視している。

なぜならば、相同的な位置にある階層は、階級的な立場の違いにもかかわらず共通の特性をもっている点に注目しているからである。それは次の指摘に端的に示されている。

「支配階級空間と中間階級空間との相同性が、両者の構造が同じ原理の産物であるという事実によって説明されるということは、ただちに見てとれる。いずれの場合にも共通して持てる者……と持たざる者とがあり、前者は多くの場合後者よりも高齢で、ほとんど暇な時間がなく、経営者層や自営農の子弟であることが多いのにたいし、後者はとくに学歴資本と暇な時間に恵まれており、中間階級・上流階級の給与生活者層あるいは労働者階級の出身であることが多いという具合に対立しているのである。両空間において対応する位置を占めている人々……は、主としてその資産構造における支配的資本の量の大小によって、すなわち同種類の希少な資源の個々人による所有量の程度差によって、分かたれることになる」<sup>(4)</sup>。

いわば、資本の量が異なり、階級的立場が異なっているにもかかわらず、資本の構造が同じ階層間の共通性に注目しているのである。

さらに、ブルデューは、こうした考え方にたつて、現実の社会において往々にしてみられる階級的な立場を越えた「同盟」の客観的基盤を、別の論文において、次のような形で説明している。

「象徴的な生産の循環を断ち切るという観点からみれば、最も重要なことは、次のような事実である。すなわち、異なる諸領域の内部における位置（そしてそれは、支配と被支配の関係というどの領域においても変わることのない普遍的な内実をもつ）の相同性に基づいて、諸同盟が多かれ少なかれ持続し、つねに多かれ少なかれ意識的な誤解のうえに成り立ちうるということである。知識人たちと工業労働者の間にある位置の相同性——前者が権力の領域の内部において占めている位置、すなわち工業企業主、商業企業主に対する位置は、全体としての社会空間に占める工業労働者たちの位置と相同である——は、曖昧な同盟の基盤である。その中で、文化的な生産者、つまり支配層の中での被支配的な人々は、支配されている人々に世界観の客観的な形成手段を提供したり、明示的な理論や制度化された代理手段——組合組織、政党、動員やデモンストレーションの社会的技術等々——によって、彼らの利害を代表したりするために、蓄積された文化資本を用いる」<sup>(5)</sup>。

ここに、明らかに相同性の考え方が、知識人と工業労働者の同盟という現実の問題の客観的基盤を説明する際にもちいられていることがうかがえる。

こうして、ブルデューは、独自の視点・方法に基づいて構築された「客観的階級」から構成される、社会空間における階級構造を明らかにしている。

ところで、ここで問題としなければならないことは、このような形で明らかにされた社会空間における階級構造は、様々な職業の配置構造に他ならないということである。本来であれば、すでに述べたように、階級・階層は資本の量と構造およびそのあり方の変化、つまり社会的軌道によって分類されるはずである。したがって、特定の職業がこれらの指標からみた場合、同一の特徴を持つ場合を除いて、職業が特定の階級・階層をあらわすことはありえない。しかも、職業はその内部に多様な資本の量・構造、そして多様な軌道をもつ階層が含まれていることが一般的である。にもかかわらず、ブルデューの場合、「客観的階級」はすべて職業のカテゴリーによって示されているのが

現実である。それゆえ、多様な職業をこれらの指標に基づいて分類し、その配置構造を階級構造として描いているといった方が真実に近い。その意味で、ブルデューが描く階級構造は、すでに述べた次元・指標に基づいて諸個人を単位にして構築した階級・階層の配置構造になっているとはいいいがたい。たしかに、ブルデューは、「分析に用いた職業カテゴリーが、妥当な基準となりうるかどうかという観点から見てもその均質度がきわめてまちまちであり、たとえば工業実業家および大商人の場合には、資本にたいして権力を行使しうる資本の持主、すなわち大経営者層を他から切り離して取りだすことができなくしてしまうといったぐあいに不完全なものである」<sup>(6)</sup>としている。また、「さまざまな職層内でのばらつきを示す厳密な指標を用いることができないので、農業従事者、商・工業経営者、職人・商人など、最もそのメンバーの異質性が高いカテゴリーについては、これを限定する上下両端間に職層名をタテ方向に記すことによって、構成員の経済的・文化的ばらつきを示すことにした」<sup>(7)</sup>ともいつている。したがって、彼自身も職業カテゴリーで階級・階層を示すことは、必ずしも妥当ではないと考えている。しかし、それならば、なぜ職業カテゴリーにこだわらない形で、階級を分類しないのか。この点がよく理解できない。

しかも、そのことは、実際の階級分類の基準が必ずしも明確でないという点とも関連する。つまり、ブルデューは、資本の量の多寡によって支配階級(上流階級)、中間階級、庶民階級の三大階級を指定し、それぞれの階級に属する職業カテゴリーの配置を検討し、支配階級と中間階級の交差配列構造と両階級内における特定階層の相同性を問題にしている。しかし、実際に三つの階級を分類する基準、すなわち階級を分類する資本の量の基準値は、明確にされていない。実際には、各階級に属する職業カテゴリーの配置が示され、それらのカテゴリーの収入、支出、生活様式等が示されているにすぎない。そもそも、経済資本は別にして、文化資本や社会関係資本を量として把握することは、可能なことなのであろうか。それらの資本を獲得するのに費やされた労働時間に還元する方法が明示されていないこともあって、疑問が残る。

また、支配階級や中間階級の内部に存在する、多様な階層を分類する際にも、その基準が明確ではないという問題がある。階級分類の視点・方法からみれば、資本の総量が同じ階級・階層であっても資本の構造が異なれば、社会空間における位置は異なるはずであり、それが支配階級や中間階級の交差配列構造を形作る原因になっている。しかし、実際に交差配列構造を示す場合に用いられているのは、経済資本と文化資本の総資本量に占める構成比に限定されており、資本のもうひとつの形である社会関係資本は問題にされていない。資本の構造といっても、厳密に言えば、経済資本と文化資本(しかも文化資本の一形態としての学歴資本)<sup>(8)</sup>の関係になっているのである。

こうしてみると、すでに述べた、「客観的階級」を構築する際の視点・方法と実際に描かれた社会空間における階級構造とのあいだには、少なからぬ断絶があるとみなさざるを得ない。その意味において、ブルデューの階級論には、視点・方法と実証とのあいだに埋めなければならない溝が存在しているといえる。

## 第2節 階級構造の再編メカニズム

さて、こうして描かれた社会空間における階級構造は不変なものではない。かならず変化するのである。そこでは、社会空間における階級構造の再編メカニズムが問題にされなければならない。もちろん、ブルデューは、この点についても、独自の考察を行っている。

彼はこの点を考える際に、再生産の戦略という概念を導入している。

再生産の戦略とは、「無意識的にせよ意識的にせよ、現象的にきわめて異なる多様な慣習行動を通して自分の資産を保持しあるいは増大させ、またそれと関連して、階級の関係構造における自らの

位置を維持しあるいは向上させようとする……慣習行動の総体」<sup>(9)</sup>である。「これらの戦略は、将来に関する意向……を媒介として、まず第一に再生産すべき資本の量と構造によって、……規定されてくる。そして第二には、制度化されているものであれないものであれ、それ自体が諸階級間の関係の状態の関数である再生産手段のシステムの状態（慣習や相続法の状態、労働市場の状態、学校制度の状態、等々）によって規定され」<sup>(10)</sup>るものである<sup>(11)</sup>。

ところで、ブルデューは、こうした再生産の戦略は、資本構造の転換を伴いながら進展するものとして考えている。つまり、再生産の戦略は、三つの資本、すなわち経済資本、文化資本、社会関係資本それぞれを別種の資本に転換しながら、進展するということである。したがって、「経済資本の学歴資本への転換は、実業ブルジョワジーがその相続者たちの一部または全部の位置を保持することを可能にする戦略のひとつである」<sup>(12)</sup>といえる。いいかえれば、再生産の戦略は、転換の戦略を伴う形で進められるといってもよい。なぜなら、「各集団は絶えざる作用・反作用を通して、社会構造におけるその位置を維持しようとしたり変化させようとしたりする。あるいはもっと正確に言えば、階級分化の進行がある段階に達してもはや変化させることによってしか保守できなくなったとき、保守するために変化させるのであるが、転換の戦略というのはこうした作用・反作用の一側面にほかならない」<sup>(13)</sup>からである。転換の戦略は、その結果として、固有の社会的軌道を生み出すのである。ここに、転換の戦略と社会的軌道の概念の関連が見いだせる。

だが、ここで注意しなければならないことは、こうした転換の戦略を伴う再生産の戦略は、すでに述べたように、軌道の概念が自由な社会移動を示す概念ではないのと同様に、決して諸個人のいわゆる自由な社会移動をもたらすものではないということである。なぜなら、再生産の戦略・転換の戦略は、すべての人々に共通して営まれるものだからである。つまり、再生産の戦略という考え方は、「関係しているすべての集団がみな同じ方向に、同じ目的に向かって、同じ特性をめざして走っているということを前提とし、また要求する」<sup>(14)</sup>。したがって、その結果、全体構造の転換が生じるが、それは、出発点における諸個人間の社会的距離を基本的に維持したままであり、諸個人に即してみれば、社会空間における諸個人の相対的位置は結局変化しないからである。社会移動が一見自由に行なわれているように見えても、諸個人の社会空間における社会的位置は再生産されているのである。まさに、ここに、ブルデューの「再生産」論の真髄があるといえる。

しかしながら、この再生産の戦略・転換の戦略という概念は、実は必ずしも厳密に規定された概念となっていないという点にも注意しなければならない。とりわけ、軌道の概念との関連が明確ではない。たとえば、転換の戦略というのは、一方では、特定の資本を別種の資本に転換させ、その結果、資本構造のあり方を変化させるという意味で用いられている。それゆえ、転換の戦略によっては、資本の総量は変化しないのであり、少なくとも、階級間の移動は生じえないことになる。他方で、再生産の戦略・転換の戦略は、その結果として特定の集団の軌道や個人的軌道を形づくるものとして指定されている。しかし、個人的軌道の概念は、すでにみた如く、階級間の移動を含めた概念として考えられており、実際に社会空間における階級・階層の配置図には、それぞれの階級のそれぞれの階層の内部に、出身階級の異なるいくつかの層が含まれていることが示されている。いいかえれば、個人的軌道の概念には、資本量の変化が生ずる場合も含まれているということである。したがって、再生産の戦略・転換の戦略は決して諸個人の相対的な社会的位置を変化させず、その意味で再生産のメカニズムが貫徹されるという考え方と、再生産の戦略・転換の戦略の結果として生ずる社会的軌道には階級間の個人的な移動が含まれるという考え方を内包しているといってよい。そこには、明らかに矛盾がある。だが、こうした疑問に答えるブルデューの論述は、今のところ見られない。したがって、この点にブルデューの階級構造の再編メカニズムに関する考え方の問題が

存在しているといわざるをえない。

〔注〕

- (1) 石井洋二郎訳『ディスタンクシオン I』新評論, 1989年, 192~193頁参照。
- (2) 同上, 180頁。
- (3) 同上, 186~187頁。
- (4) 同上, 187頁。
- (5) Bourdieu, P. "The Social and the Genesis of Groups", *Theory and Society*, vol. 14, no. 6 1985 p. 737.
- (6) 前掲『ディスタンクシオン I』, 194頁。
- (7) 同上, 194頁。
- (8) ブルデューは文化資本を身体化された文化資本, 物財として所有される客体化された文化資本, 学歴資本や各種の資格のないいわば制度化された文化資本という三つの形態をもつものとしている(Bourdieu, P. "Les trois etats du capital culturel", *Actes de la recherche en science sociales*, 30, 1979 (福井憲彦訳「文化資本の三つの姿」『アクト』No. 1 日本エディタースクール, 1986年)参照)。しかし, 資本の構造を明らかにする際には, 制度化された形態である学歴資本のみが用いられている。
- (9) 前掲『ディスタンクシオン I』, 199頁。
- (10) 同上, 199頁。
- (11) また, ブルデューは再生産戦略には, 婚姻戦略, 相続戦略, 経済戦略, 教育戦略といった多様な形態があり, 経済資本に対する文化資本の比重が高いほど, また教育戦略の効果が他の再生産戦略よりも実効性が強ければ強いほど, 教育投資が行なわれるとしている(ブルデュー〈加藤晴久編〉『ピエール・ブルデュー 超領域の人間学』1990年, 84~85頁)。
- (12) 前掲『ディスタンクシオン I』, 213頁。
- (13) 同上, 243頁。
- (14) 同上, 252頁。

終章 ブルデューの階級論の意義と問題点

ブルデューの階級論は, 主観主義的社会学と客観主義的社会学を克服しようとする独自の社会学の構築にとってきわめて重要な位置を占めている。誤解をおそれず図式的にとらえれば, それは, 構造—ハビトゥス—慣習行動という三位一体の理論図式の中で, 構造としての社会空間のあり方を明らかにしようとするものとして位置づけられる。同時に, ブルデューの階級論は, 彼の文化的再生産論にとっても不可欠なものとして重要な意義をもっている。それは, すでに述べた如く, 一般に考えられている階級・階層間の社会移動が, 決して, 階級・階層間の自由な社会移動を意味するものではなく, むしろ, 社会空間における諸個人の相対的な社会的位置を再生産するものであるという考え方に端的に示されている。

このような意味において, ブルデューの階級論は彼の理論体系にとって重要な意義をもっているといえる。

同時に, ブルデューの階級論はきわめてユニークな概念と論理構成を有しており, 階級論一般としても重要な位置を占めている。この点について, 以上で明らかになった諸点をまとめれば, 以下の如くなる。

第一に, ブルデューの階級論は, 経済一元論的なマルクス主義的階級論と操作的な社会移動論・社会成層論の双方を克服しようとする志向性を持ち, それにふさわしい視点・方法を提起している点を高く評価する必要がある。それは, 多様な資本概念に基づく, 資本の量と構造およびそのあり

方の変化という視点・方法で「客観的階級」を構築しようとする試みそのものの中に明確に現われている。

第二に、「客観的階級」を構築する際に、社会的軌道という概念を導入している点も独自に評価される必要がある。それは、集団的軌道の概念によって、社会移動におけるいわゆる強制移動の側面を明らかにするだけでなく、強制移動そのものは社会空間における諸個人の相対的な社会的位置の変化を必ずしもストレートに意味していないという点を明確にしたという点で、重要な意義をもっている。それは、従来の社会移動論・社会階層論に欠けていた視点であるといえる。他方で、個人的軌道の概念の導入によって、諸個人の生活史のもつ意義と階級内における諸個人の主体的態度の相違を解明する手がかりを与えているという点でも注目に値する<sup>(1)</sup>。

第三に、相同性の概念の意義も評価しなくてはならない。相同性の概念は、すでに述べたように、資本の量という視点からみると、明らかに異なっている階級・階層も、資本の構造という点からみた場合には、類似の性格をもつ階層があるという点を明らかにするものである。ブルデューはそれに基づいて、階級的立場が異なる者同士であっても、ひとつの同盟を構成することが可能であるという考え方を導き出している。それは、一般的にいえば、階級的立場を越えるいわゆる統一戦線を構築していく根拠を、従来の要求や利害の一致といった社会的な状況によって変わりうるものではなく、その背後にある、社会的状況の如何にかかわらず、決して変化しない客観的で構造的な根拠として提示したものと受けとめることができる。それゆえ、相同性の概念は、統一戦線論を深化させていく上でのひとつの問題提起としての意味をも有しているといえる。

このように、ブルデューの階級論は、きわめて積極的に評価すべき点を、たしかにもっている。しかし、彼の階級論には、いくつかの問題があることも指摘しなければならない。

第一に、彼の階級概念が抱える問題がある。ブルデューの階級概念には、おおきくいって、ふたつの概念があるといえる。ひとつは、政治的、運動論的視点から把握される組織化された階級であり、いわば「対自的」階級に相当し、もうひとつは、彼のいう構築された階級であり、「即自的」階級にあたるものである。前者が実体としての階級概念として把握され、後者は非実体としての階級概念として理解されている。したがって、「客観的階級」を構築するということは、客観的な指標に基づいて社会空間における諸個人の相対的位置を明らかにするという意味を持つにすぎない。その意味からいえば、ブルデューが主として議論している「構築された階級」という階級概念は、彼が批判した操作的な社会移動論・社会成層論と同様、操作的な階級概念であるといえる。この点に、ブルデューの階級論の基本的な問題がある。

第二に、彼の資本概念を問題にしなければならない。ブルデューは経済・文化・社交のそれぞれの領域において意義をもつ経済資本・文化資本・社会関係資本等の資本の諸形態を提示している。他方で、形態の異なる資本をすべてに共通する量として把握する場合、その尺度を労働時間に求めている。いわば、資本の本質として労働時間ないし労働を指定しているといつてよい。しかし、経済資本は別にして、文化資本や社会関係資本が労働によって生み出されるという考え方は、必ずしも説得的ではない。かりに、文化や社会関係が労働に還元されうるとしても、それは、経済資本に還元されることを媒介としてはじめて可能になると考えるのが現実的であり、その場合には、経済的な側面だけでは把握できない階級の現実を浮き彫りにするために導入された、文化資本や社会関係資本の意義が失われてしまう。つまり、ブルデューの資本概念は、その本質と形態の間に矛盾を内包しているといいかえてもよい。これは、資本の本質をマルクスの労働価値説のアナロジーで把握する一方、資本の形態の場合には、近代経済学的な資本概念に近い形で把握しているために、必然的に生じる矛盾であるといえる<sup>(2)</sup>。

第三に、ブルデューの階級論の視点と階級分類の具体的な方法が、整合していないという問題もある。

①たとえば、階級分類をするときの視点として、経済資本、文化資本、社会関係資本という3種の資本の総量とそれらの構造およびそのあり方の変化をあげているが、階級分類をするときには経済資本と文化資本しか取り上げられておらず、社会関係資本はまったく無視されている。また、文化資本は、身体化された文化資本、財としての客体化された文化資本、学歴・資格という姿をとる制度化された文化資本という3つの姿をとって現われるとされているものの、実際に階級分類をする際には、もっぱら学歴しか扱われていない。

②もちろん、それは、階級分類を実際に行なうにあたって有効なデータが見つからないという問題がひとつの原因になっている。しかし、それだけではなく、特定の職業を、これらの視点によって、社会空間の中に配置するという彼の階級分類の方法にも大きな原因があるといえる。いいかえれば、帰納的な方法で諸個人を単位にした階級を分類するという方法ではなく、職業を単位として演繹的な方法で、職業の相対的な位置関係を明示する＝階級を分類するという方法をとっているという点に起因しているということである。

③このことは、階級・階層の境界線がすでに述べた視点からは明示されないという結果をもたらしている。たしかに、ブルデューは支配階級、中間階級、庶民階級という三大階級を設定し、様々な職業のうちどれがどの階級に属するかということを示している。しかし、それらの階級を分類する資本量の境界線は明示されていない。したがって、なにゆえに、それぞれの職業がそれぞれの階級に振り分けられているのか判然としない。さらに、支配階級や中間階級の場合、資本の構造の違いに基づいて、いくつかの階層が交差配列構造を形成しているとされるが、それも職業を単位として把握され、その配置を決定する具体的な資本構造のあり方は示されていない。

こうして、階級分類の視点と具体的方法の不整合は、けっして有効な統計データの欠如だけではなく、むしろ職業を単位とした演繹的な階級分類という方法に起因しているといわざるを得ない。

第四に、階級構造の再生産の考え方を問題にしなければならない。ブルデューは再生産の戦略・転換の戦略を用いて、人々は自らの立場を維持し向上させようとするが、すべての人が同じように行動するので、たとえ現象的には職業のあり方が変化しても、社会空間における人々の相対的位置は変わらないとしている。いわば、平行移動しか起こらないということである。それゆえ、再生産という意味は、社会空間における人々の相対的位置が変わらないというものとして理解できる。しかし、他方で、諸個人は再生産の戦略・転換の戦略によって、独自の個人的軌道を形成するとされ、その結果、各階級・階層はその内部に出身階級の異なる層を内包することになるとされている。その意味で、再生産の概念と軌道の概念は両立しえないものであるといわざるを得ない。いいかえれば、ブルデューの再生産論は、再生産しない者の存在を例外として認める傾向としての再生産論と自己完結的な構造としての再生産論が無媒介に同居しているといつてよい。それゆえ、ここに、ブルデューの再生産論の限界があるといえる<sup>(3)</sup>。

以上のように、ブルデューの階級論は複雑化した現代社会における階級を把握する上で、いくつかの貴重な視点を提起したものの、同時に、少なからぬ問題を抱えていることが明らかになった。その意味で、ここにブルデューの階級論の到達点と課題があるといえるのである。

#### 〔注〕

(1) Chris Wilkes も同様な指摘を行なっている (Wilkes, C. "Bourdieu's Class", in Harker, R., Mahar, C. &

Wilkes, C. (eds), *An Introduction to the Work of Pierre Bourdieu*, (Macmillan Press)1990 p. 128).

- (2) ちなみに、ブルデューは自らの理論的態度を、次のように、「いろいろな手法の組み合わせ」という形で表現している。

「統計学を使えば現象学などは無関係、現象学を使えばマルクス主義など聞きたくもない。マルクス主義を使えばウェーバーなんかはごめんだ、ウェーバーを使えばデュルケームは無視、というのが普通です。私はそんなことはない、研究の対象が複雑なのだから、すべての道具は有用だという立場です。いろいろな手法を組合わせて使います。」(ブルデュー〈加藤晴久編〉『ピエール・ブルデュー 超領域の人間学』1990年、32～33頁)。

- (3) この点については、拙稿「P.ブルデューの文化的再生産論の到達点と課題」『北海道教育大学紀要』(第1部C)、第41巻・第2号、1991年参照。

(本学助教授 旭川分校)